

国語 目的や意図に応じて考えが伝わるような書き表し方を工夫する力

複数の情報を関連付けて考えを記述する問題では、本校の正答率は全国や県平均を下回っており、無解答の割合も高かったです。子どもたちは、普段の授業から自分の考えをもったり、書いたりすることは行っていますが、自由な記述ではなく「何文字以上」「この言葉を用いて」などの条件に合わせて書く経験は少ないと考えられます。そのため、記述への抵抗感や自信のなさから無解答を選択している子も一定数いるのではないかと考えられます。

問題より一部抜粋

〈本を読んで分かったこと〉	〈使ってみて分かったこと〉
<ul style="list-style-type: none"> ○ブックカバー <ul style="list-style-type: none"> ・何回か折るだけで、すぐに完成する。 ・本の大きさに合わせて包むことができる。 ○ペットボトルカバー <ul style="list-style-type: none"> ・ペットボトルを包んで持ち運ぶことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ブックカバー <ul style="list-style-type: none"> ・よごれがつくを防ぐことができてよかった。 ・落としたときに、本がきずつかなかった。 ○ペットボトルカバー <ul style="list-style-type: none"> ・水てきが荷物につかなくてよかった。 ・温かい飲み物が冷めにくかった。

物を包む使い方
手ぬぐいは、いろいろな物を包むことができます。

↓

物を包む使い方

◆

※上の原稿用紙は下書き用なので、使っても使わなくてもかまいません。
解答は、解答用紙に書きましょう。
※◆の印から横書きで書きましょう。どちらうで横書きで書いて続けて書きましょう。

(条件)
○「ちらしの」部を書き直し、くわしくすること。(一文でなくてもよい)
○「調べたこと」(本を読んで分かったこと)と「使ってみて分かったこと」のそれぞれから言葉や文を取り上げて書くこと。
○六十字以上、百字以内にとめて書くこと。

伝えたい内容を明確につかみ、内容のまとまりごとに分けて書くことができるかをみる問題。

【学校では】

感想や授業の振り返りなどを書くことは、どの教科でも行っています。自由記述ではなく「どこからそう思ったのか」「前の時間と比べて変わったことはあるか」など書く視点を与えて書く機会を増やしていきたいです。社会や理科では図や表などの資料をもとに考えることが多いですが、一つの資料から読み取れることをたくさん出し合って見方や考え方を共有し「そうやって考えることもできるんだ」という読み取りの素地を養っていきたいです。また、無解答が多いという実態も踏まえ、まずは書いてみようという取り組み姿勢を育てるために「メモや箇条書きでもいいよ」など、取り組みやすさを重視した声かけをしていきます。

【家庭では】

自分の考えを書いたり話したりするためには、語彙力が必要になります。言葉を知らないことが記述への抵抗感を生んでいるとも考えられます。そのためにご家庭では、日常の会話を学びにつなげてみるのが効果的だと思います。例えば「怒ると叱るは意味がちょっと違うんだよ。どう違うと思う？」など投げかけてみてください。語彙の幅を広げるきっかけになるはずですよ。学校でも積極的に辞書を活用して言葉を調べる機会を設けていきます。

算数

「数と計算」の学習について

異分数の足し算 $3/4+2/3$ について、どんな数をもとにしていくつ分と考えるとよいかという問題では、無回答や不正解が多くありました。数直線上の分数の値を読み取る問題でも不正解が多くありました。このことから、分数が表す量がどのくらいであるかの理解に難しさを感じていると考えます。生活の中でも、整数や小数を感じる機会に比べ、分数を感じる機会が少ないことも要因として考えられます。

【学校では】

分数について、どんな量なのかを図や数直線で捉えられるようにすることを大切にしていきます。計算の学習においても、どのように計算しているのかを図や数直線を使って説明できるようにしていきます。文章問題などでは、線を引きながら数量をとらえられるようにします。

【家庭では】

家庭学習の際には、計算を早くできることも大切ですが、途中式を正しく書きながら解いていくとよいです。また、ピザやケーキを分けるなど、生活の中にある分数を見つけてみることもよいと思います。

「図形」の学習について

平行四辺形の作図に関わる問題や、台形を選ぶ問題では、正答が約半数の児童にとどまりました。形そのものの特徴への理解や、示された手順を理解してかくという経験がまだまだ足りないと考えられます。数年前と違って、デジタル教科書を使って教科書の絵や写真、動画を見ながらの授業が多くなってきており、実際に自分で図形をかいたり、作ったりという操作活動が減ってきています。どんな形であるかを体験を通して、図形への理解を深めていくことが大切であると考えます。

【学校では】

今後も図形の学習では、具体物を使って問題に取り組む場を積極的に取り入れていきます。実際にテープを折ったり、折り紙を使って図形を作ったりするような活動を通して、図形を教科書の図や言葉で理解するだけでなく、図形の性質を経験として理解できるよう、体験的な授業づくりを行います。

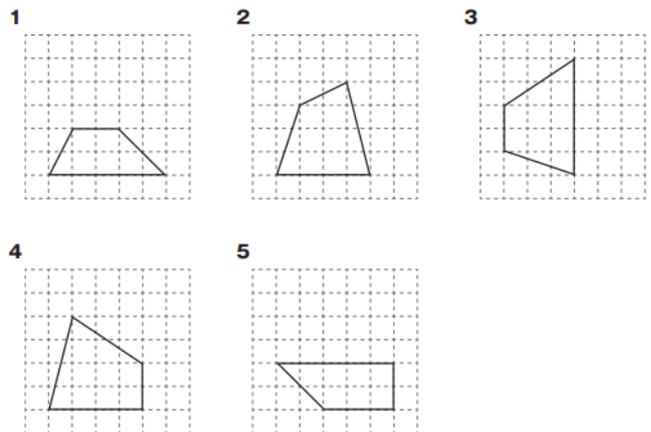
また目的の図形をつくるために、どのような操作をすればよいか、図形の意味や性質を基に、見通しを立てて考え、自分の考えをもったうえで実際に図形をつくって確かめることを意識した授業をしていきたいと思います。

【家庭では】

家庭学習で図形の問題に取り組む際に、実際にその図形をかきながら問題に取り組んだり、紙に書いて切り取って考えたりして、具体的な図形が思い描けるようにしていただけるとよいと思います。また、身の周りにある形がどんな形であるか、図形の特徴をもとに考えられるとよいです。

「変化と関係」の学習について

ハンドソープが10パーセント増量したときに、もとの何倍になったかを答える問題では、1.1倍と答えるところを、0.1倍と答える児童が半数いました。割合についての正しい理解の不足や、割合そのものに苦手意識があると考えられます。1倍はもとの量と変わらない量であることや、パーセントの正しい理解ができていないと考えられます。



【学校では】

具体物を使いながら、量と割合を関連付けながら、視覚的に考えられる機会を充実させていきます。また、身近にある割合（パーセント）などを紹介し、割合をより身近に考えられるようにしていきます。

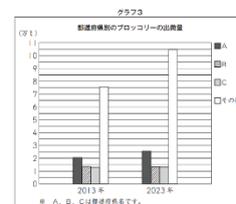
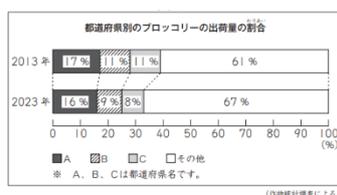
【家庭では】

身近なものの中で、何%引きがいくらになるのか、何%増量がどれだけの量になっているかを考えてみるのも有効かと思えます。

「データの活用」の学習について

棒グラフ、表、帯グラフなど、複数のデータが問題の中で示されていました。適切なグラフを選んで、ブロッコリーの出荷数が増えているかどうか理由を説明する問題では、正しく理由を説明できる児童は半数を大きく下回っていました。帯グラフと棒グラフの役割の違い

や、グラフのどの部分の数値を読み取るかが理解できていない児童が多くいました。また、グラフを選択しているものの理由については無回答という児童もいました。グラフの中の数値を正しく捉えたり、考えたいことがグラフのどの部分に現れるかを理解したりすることなど、グラフを正しく理解し活用していく力をつけていく必要があると考えられます。



【学校では】

データの活用の授業では、自分の考えを相手に伝える活動を積極的に取り入れていきます。その際に、「〇〇といえる。なぜならば・・・」と、自分の主張とその理由を数値やデータを用いて述べることを大切にしていきます。また、算数だけでなく、社会の授業などでも、資料の中の数値を正しく捉え、考えをつくれる児童を目指します。係活動などでも、表やグラフなどを効果的に活用するなど、日々の生活の中からデータに触れていけるようにしていきます。

【家庭では】

様々なグラフに触れる機会を多くできるとよいです。自主学習などで、調べたことを表やグラフにまとめたり、そのことから考えたことをまとめたりできるとよいです。また、TVや新聞、雑誌等の中で示されるグラフから、どんなことが考えられるかを家庭の中で話すなど、データを見る目を養っていけるとよいです。

理科

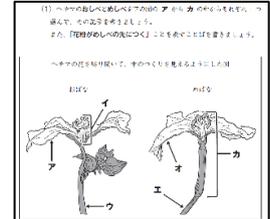
「知識・技能」に関する問題から

右のように、アルミニウム、鉄、銅について、それぞれの性質について「電気を通すか」「磁石に引き付けられるか」を問われたが、正答率はとても低かったです。3か4と答えた割合が非常に多かったことから、「金属は、すべて電気を通す」と「鉄だけが磁石を引き付ける」という知識を混同していると考えられます。3年生で学習する内容ですが、忘れてしまうこともあるため、この性質が日常生活で利用されていることなど、身近なことに結び付けて、知識を定着していけるとよいと考えます。

(1) アルミニウム、鉄、銅の性質について、下の 1 から 4 までの中からそれぞれ 1 つ選んで、その番号を書きましょう。同じ番号を選んでかまいません。

- 1 電気を通し、磁石に引きつけられる。
- 2 電気を通し、磁石に引きつけられない。
- 3 電気を通さず、磁石に引きつけられる。
- 4 電気を通さず、磁石に引きつけられない。

「おしべ」「めしべ」「受粉」「蒸発」「水蒸気」などの理科用語に関する問いで、正しく答えられていないところが見られました。理科で出てくる用語や言葉は、名称や意味についてをよく理解し、日常的に使えるようにすることで、知識をより身に付けることができると考えます。



【学校では】

学習する前の前提として、「鉄」「アルミニウム」「銅」など、これまで子どもたちが、何となく「鉄っぽいもの」のようにとらえていたものを、区別して理解し、学習を進められるようにしていきます。

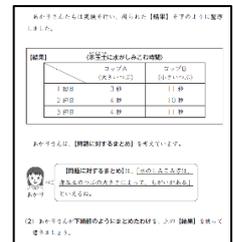
ものの性質については、授業で、常に関連付けて考えることを意識して学習するようにします。例えば、「空気」と「水」や、金属である「鉄」「アルミニウム」「銅」など、比較しながら共通点や相違点を明らかにしていきます。また、授業や単元の終末で、身近な事象と関わらせて考えることを続けていきます。その際、理科で身に付けた用語を使って説明をすることを大切にしていきたいと思います。

【家庭では】

身近な電化製品などの仕組みや、自然現象についてを話題にしたり、疑問をもったり、学習したことと結び付けて考えたりして、常に興味を持って身の回りを見ていけるようにしていきたいです。自主学習などで、理科で学習したことを振り返ったり、さらに自分で調べたりしていけるとよいです。

「思考・判断・表現」に関する問題から

右の「問題に対するまとめ」のようにまとめたわけを問う問題では、①結果から分かる数値を示し、②比較し、結論を導いた記述ができた解答は、非常に少なく、①や②に触れず答えたり、無解答だったりした割合も多かったです。事実から考えたことを説明できるように、話したり書いたりすることに苦手がみられます。事実だけ、考えたことだけでなく、つなげて文章化することに慣れていくことを大切にしていけるとよいと考えます。



4つから、「適した温度(室温)」が必要かを調べるための実験を2つ選ぶ問題では、2の実験を選ぶことができた児童は比較的多くいましたが、対象の実験を正確に選べた児童はその半数ほどでした。実験をする際は、調べたいことの条件だけを変え、その他の条件をすべて統一する条件制御を誤ってしまうところが見られました。条件に注目して、選択肢を丁寧に読み取り、選ぶことが大切であると考えます。



【学校では】

「事象→問題→予想(仮説)→実験→結果→考察→まとめ」の学習の流れを大切に、授業を進めていきます。実験では、調べることに對して「変える条件」「変えない条件」を明確にして進めていくようにします。結果から何が分かるか、出てきた考えはどのことから分かるのか、など、事実を大切に進めていけるようにします。また、考えを文章にまとめることも大切になります。単元の終末では、自然事象を説明したり、ものづくりの学習でできたものを学習した内容と関わらせて話したりする活動も取り入れるようにするとよいです。

【家庭では】

自然災害のニュースや環境問題について触れたときには、どうしてそうなったのかやどうするとよいかなど話題を広げていけるとよいです。

児童質問紙

① 自分に自信がもてない児童が多い

「将来の夢や目標を持っていますか」「自分には、よいところがあると思いますか」「自分と違う意見について考えるのは楽しいと思いますか」という質問に対して、本校児童における「当てはまる」「どちらかという当てはまる」という肯定的な回答は、岐阜県や全国の回答率を下回る結果になりました。一方で「人の役に立つ人間になりたいですか」という質問に対しては90%以上の児童が肯定的に回答しています。

ここから3つの理由が考えられます。1つ目は「将来の夢＝職業」で考えている児童が多いことです。「人の役に立つことがしたい」といった思いも、将来の夢や目標であると認識していない児童がいることが考えられます。2つ目は、周りと自分を比べてしまったり、間違えることや少数派の立場になることを恐れたりするなど、仲間との関わりの中で消極的になってしまうのではないかと考えられます。3つ目は、自分がどんなことに興味・関心があるのか知らなかったり、もっと知りたい、やってみたいと思えるほどの好きなことを見つけられていなかったりするためだと考えます。

② 経験不足と考えられる児童が多い

「自然との関わり」「地域の大人との関わり」「新聞を読む」など生活の中での経験の有無を問われる質問に関して、否定的な回答が多いという結果になりました。この背景としては、コロナ禍における低学年のころの活動制限や、ICT機器を利用する場面が増加したことによる経験不足が考えられます。これまで経験したことがないことに対し、やり方が分からないからやらない、面倒くさい、諦めるという選択をしてしまうのだと考えられます。

これからの時代に求められている力は「複雑で変化の激しい社会を乗り越え、他者と関わり合いながら豊かな人生を切り開く持続可能な社会の創り手」です。これからの幸せな人生のために、自分の個性を知り、伸ばし、夢の実現に向かって分からないことに対しても努力し続ける力を高めていきたいです。

【①と②の結果を踏まえて、学校では】

本校では、「学ぶ楽しさがあり、考えを表現する力を高める授業～見方・考え方を働かせる教科指導を目指して～」を研究テーマとし、授業改善を行っています。また、指導を振り返るために3年生以上を対象として「学びのアンケート」を年2回行っていきます。6月の調査では、80%以上の児童が自身の授業中の姿を肯定的にとらえています。

「できた」「分かった」という経験を積み重ね、自信をもって活動することができるように、各学年の発達段階に応じた教育活動の工夫を行います。低学年は、自分の好きなこと、得意なこと、できることを増やし、様々な活動への興味・関心を高めながら、意欲と自信をもって活動できるようにします。中学年は、友達のよさを認め、協力して活動する中で、自分の持ち味や役割を自覚することができるようにします。高学年では苦手なことや初めて挑戦することに失敗を恐れず取り組み、そのことが集団の中で役立つ喜びや自分への自信につながるようにします。現在も、日々の授業の中で、学習内容についての見通しをもったり、学習課題を自分で解決したりすることができるように実践を行っています。「できた」「分かった」という経験を積み重ねるために、具体物や資料の提示、理解度別や解決方法別で学習を進める場を設けるなど、学年や実態に応じて様々な支援を行っています。実際に、2年生の算数の学習では、1Lが10dLということを使って学習しました。授業外の時間にも実感できるように休み時間等も操作できるようにしました。4年生では、社会科で水の学習をした際に、実際に生活の中で水を大切に扱おうと節水チャレンジを行いました。今後も経験を大切にしながら、楽しく学びが深まる授業を目指していきます。

【①と②の結果を踏まえて、ご家庭では】

自然の中での経験や、地域や習い事での経験など、新しい経験ができればいいのですが、簡単にできることではありません。しかし、日常生活でもたくさんの経験が得られます。例えば、「キャリア教育」に関わることです。家庭で話し合っ、子どもの役割を決め、実践してください。その役割を果たさないと、家族が困ってしまうことを体験することで、家族という「社会」を動かす経験を日常生活の中で実感することができます。他にも、会話の中で意識的に普段と違う言葉を使って話したり、子どもの気持ちや状態を聞いたりしてください。語彙を増やしたり、使い方を学んだりする経験になります。高学年ほど話題の中心はゲームが多く、視野が狭くなっていないかなと感じます。嬉しいことも悔しいことも、言葉の獲得もゲームからでは経験が限定されすぎていて適切な言葉を使って会話することができません。学校から配られる「家族読書」や「メディアチェックシート」も活用ください。